

退職教授挨拶



第 40 号

2014年 2 月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島 5 丁目 1 番 1 号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/株昭和堂

退任に際して



小児科学講座
教授

濱崎 雄平

会背景の全く異なる国で生活する経験を持つことを強く勧めたいと思っております。

2013年10月に65歳となり、2014年3月31日をもって佐賀大学医学部の職を退職します。今までいくつかの職場を退職し別の職場に移りましたが、全て短期間の職で、かつ自分の意志で決定してきたのに対して、今回の退職は規定によるものであり、人生の約半分に近い期間を過ごした職場を去るということでもあって、今までと違った感慨深いものがあります。

私は、1979年9月からテキサス州ダラス市(ケネディ大統領がパレード中にダウンタウンで狙撃・暗殺された都市)にあるテキサス大学の Sami I Said 教授の研究室内 research fellow として勤務しました。Said 先生は1928年カイロ生まれのエジプト人です。カイロ大学医学部でMDを取得し1953年にフルブライト奨学金で米国に行き、呼吸器学・集中治療医学の医師・研究者として業績をあげ、神経ペプチドのひとつ(VIP (vasoactive intestinal peptide) の発見者として知られています。昨年2013年4月30日に85歳で逝去されましたが、私が渡米したときは50歳の気鋭の研究者でした。VIP をはじめとする気道や肺血管に対する活性物質の生理・薬理的な役割に関してアクティブな研究成果を発表し続けていたもので、さぞかし先進の機器が備わった研究室だろうと想像していましたが、稼働している機器や測定器は日本で使用していたものよりも古い機器だったのに驚きました。最新鋭の機器は先端研究には強力なツールになります。重要なのはアイデアと透視力、継続する思考なのだということを実感として学びました。一方で、研究を支援するソフトウェア、すなわち消耗品であるとか技術職員の配置などは日本に比べて遙かにコストがかかっていた。大学院生や fellow を経済的に支援する環境がずいぶん整っていて、基本的な思考形態の差を感じました。日本も近年はずいぶんと改善されてきたと思えますが、モノは買えてもヒトは雇えない制度、機器は買おうがヒトにはお金は出さないという思考回路はもつと変えていかねばならないでしょう。研究にしても臨床にしても【ヒトを大事にする】ことが基本です。

Said 先生自身はVIP の最終的な単離と同定、当時ペプチドの単離・同定の最先端技術を持っていたスウェーデンのカロリンスカ研究所に自ら出かけて完成させたそうですが、アイデアときつかけとなるデータが得られた時に【軽いフットワークと広いネットワーク】を使って進めていくことの効果・効用を学びました。ただし、私自身はフットワークとネットワークが不得手で、Said 先生から学んだ教えを本当に有効には使うことができなかったように思います。

私が研究室に参加した次年度に Said 先生はテキサス大学からオクラホマ大学に移れることとなり、私もオクラホマ大学に移動し研究室の再立ち上げのお手伝いをしました。Said 先生の研究室は生理学・薬理的な手法で研究を行っており、それなりに充実していましたし、オクラホマ大学に移動後は research assistant professor のポジションをもらいましたが、研究を進展させるには生化学的な知識と手法を学ぶ必要があると考えて、日本から後任を紹介して、自分は1982年9月にレキシントン市にあるケンタッキー大学薬学部の Daniel T.E. 教授の研究室に移りました。T.E. 先生は台北大学出身の台湾人で PhD です。抗体作成の専門家で研究分野は脂質代謝でした。多くのアラキドン酸カスケードの代謝物のアッセイ系を確立して研究を進めていました。T.E. 先生は大学院生や fellow に【自ら手を下して実験手法を教えながら研究を進める】先生でした。アメリカは分業・支援システムが確立しているため、アメリカで教育を受けた研究者の中には、アイデアを考え、実験はテクニシャンや学生、fellow に指示し、収集したデータをまとめて分析する作業に専念して、自らは手を下さない研究者が少なくない中で、T.E. 先生の方針は私には共感できる研究・教育手法でした。昨年9月にケンタッキー大学主催で T.E. 先生

の退職を記念して Research Forum が開かれましたが、スピーカーの一人として講演するため24年ぶりにレキシントンを訪ねました。当時はダウンタウンを一人で歩くことは危険で昼間でも街を歩くのは躊躇していましたが、今回は街中を普通の住民と思われる人々が歩いていて、ホテルのフロントウーマンもこのあたりは歩いてOKと説明してくれて、むしろ以前より治安が良くなっているのに驚きました。

1983年の12月に日本に帰国して、翌年4月に佐賀医大に小児科の病院講師として赴任し、1ヶ月のうち半分は家に帰らないという診療中心の生活が続いた後、1990年から1991年の1年間はノースカロライナ州のリサーチトライアングル・パークというところにあるNIHの施設 NIEHS (National Institute of Environmental Health Science) で客員研究員として Tom Bling 先生と共同研究をしました。こ

こころが、学生や大学院生の国際保健に関する関心は予想以上に高く、着任直後に「国際医療研究会(通称国医研)」の顧問を依頼されて引き受けた。「国医研」の医学科・看護学科の学生たちは、長期休暇などを利用して、積極的に海外での研修や Study Tour に出かけて行き、見聞を広め、他大学の学生と合同

留学生在が、海外での研修や学会、医療協力活動、調査・研究などに行き、帰国の際に、私にお土産として持ってきてくれたものである。これらの「宝物」を眺めながら、異国のコーヒーや紅茶を飲むのは至福の時である。また、帰国した彼らから、珍しい土産話を聞くのが楽しみになっている。一部の大学院生や客員研究員には、彼らの体験を講義の中で紹介してもらっている。昨年は、五月・六月にかけて、英国で開催された世界災害救急医学学会に参加した際に、足を延ばして、ロンドンのセント・トーマス病院とナイチンゲール博物館を訪問した。

白衣の天使と称されたナイチンゲールは、次のような言葉を残している。「天使とは、美しい花をまき散らす者のことではなく、病める人のために



テキサス大学の研究室メンバー (1980年頃; 後列中央が Said 教授、前列右から2人目が筆者)

私は、1979年9月からテキサス州ダラス市(ケネディ大統領がパレード中にダウンタウンで狙撃・暗殺された都市)にあるテキサス大学の Sami I Said 教授の研究室内 research fellow として勤務しました。Said 先生は1928年カイロ生まれのエジプト人です。カイロ大学医学部でMDを取得し1953年にフルブライト奨学金で米国に行き、呼吸器学・集中治療医学の医師・研究者として業績をあげ、神経ペプチドのひとつ(VIP (vasoactive intestinal peptide) の発見者として知られています。昨年2013年4月30日に85歳で逝去されましたが、私が渡米したときは50歳の気鋭の研究者でした。VIP をはじめとする気道や肺血管に対する活性物質の生理・薬理的な役割に関してアクティブな研究成果を発表し続けていたもので、さぞかし先進の機器が備わった研究室だろうと想像していましたが、稼働している機器や測定器は日本で使用していたものよりも古い機器だったのに驚きました。最新鋭の機器は先端研究には強力なツールになります。重要なのはアイデアと透視力、継続する思考なのだということを実感として学びました。一方で、研究を支援するソフトウェア、すなわち消耗品であるとか技術職員の配置などは日本に比べて遙かにコストがかかっていた。大学院生や fellow を経済的に支援する環境がずいぶん整っていて、基本的な思考形態の差を感じました。日本も近年はずいぶんと改善されてきたと思えますが、モノは買えてもヒトは雇えない制度、機器は買おうがヒトにはお金は出さないという思考回路はもつと変えていかねばならないでしょう。研究にしても臨床にしても【ヒトを大事にする】ことが基本です。

Said 先生自身はVIP の最終的な単離と同定、当時ペプチドの単離・同定の最先端技術を持っていたスウェーデンのカロリンスカ研究所に自ら出かけて完成させたそうですが、アイデアときつかけとなるデータが得られた時に【軽いフットワークと広いネットワーク】を使って進めていくことの効果・効用を学びました。ただし、私自身はフットワークとネットワークが不得手で、Said 先生から学んだ教えを本当に有効には使うことができなかったように思います。

私が研究室に参加した次年度に Said 先生はテキサス大学からオクラホマ大学に移れることとなり、私もオクラホマ大学に移動し研究室の再立ち上げのお手伝いをしました。Said 先生の研究室は生理学・薬理的な手法で研究を行っており、それなりに充実していましたし、オクラホマ大学に移動後は research assistant professor のポジションをもらいましたが、研究を進展させるには生化学的な知識と手法を学ぶ必要があると考えて、日本から後任を紹介して、自分は1982年9月にレキシントン市にあるケンタッキー大学薬学部の Daniel T.E. 教授の研究室に移りました。T.E. 先生は台北大学出身の台湾人で PhD です。抗体作成の専門家で研究分野は脂質代謝でした。多くのアラキドン酸カスケードの代謝物のアッセイ系を確立して研究を進めていました。T.E. 先生は大学院生や fellow に【自ら手を下して実験手法を教えながら研究を進める】先生でした。アメリカは分業・支援システムが確立しているため、アメリカで教育を受けた研究者の中には、アイデアを考え、実験はテクニシャンや学生、fellow に指示し、収集したデータをまとめて分析する作業に専念して、自らは手を下さない研究者が少なくない中で、T.E. 先生の方針は私には共感できる研究・教育手法でした。昨年9月にケンタッキー大学主催で T.E. 先生

の退職を記念して Research Forum が開かれましたが、スピーカーの一人として講演するため24年ぶりにレキシントンを訪ねました。当時はダウンタウンを一人で歩くことは危険で昼間でも街を歩くのは躊躇していましたが、今回は街中を普通の住民と思われる人々が歩いていて、ホテルのフロントウーマンもこのあたりは歩いてOKと説明してくれて、むしろ以前より治安が良くなっているのに驚きました。

1983年の12月に日本に帰国して、翌年4月に佐賀医大に小児科の病院講師として赴任し、1ヶ月のうち半分は家に帰らないという診療中心の生活が続いた後、1990年から1991年の1年間はノースカロライナ州のリサーチトライアングル・パークというところにあるNIHの施設 NIEHS (National Institute of Environmental Health Science) で客員研究員として Tom Bling 先生と共同研究をしました。こ

こころが、学生や大学院生の国際保健に関する関心は予想以上に高く、着任直後に「国際医療研究会(通称国医研)」の顧問を依頼されて引き受けた。「国医研」の医学科・看護学科の学生たちは、長期休暇などを利用して、積極的に海外での研修や Study Tour に出かけて行き、見聞を広め、他大学の学生と合同

留学生在が、海外での研修や学会、医療協力活動、調査・研究などに行き、帰国の際に、私にお土産として持ってきてくれたものである。これらの「宝物」を眺めながら、異国のコーヒーや紅茶を飲むのは至福の時である。また、帰国した彼らから、珍しい土産話を聞くのが楽しみになっている。一部の大学院生や客員研究員には、彼らの体験を講義の中で紹介してもらっている。昨年は、五月・六月にかけて、英国で開催された世界災害救急医学学会に参加した際に、足を延ばして、ロンドンのセント・トーマス病院とナイチンゲール博物館を訪問した。

白衣の天使と称されたナイチンゲールは、次のような言葉を残している。「天使とは、美しい花をまき散らす者のことではなく、病める人のために



「私の宝物」

新地浩一

で研究会を開催して、勉強を続けている。大学院生の教育にも力を入れるべく、募集したところ、初年度から毎年三名前後の入学希望者があり、約二十名の卒業生を出すことができた。彼らの世界各国での希望の研修をサポートすることに、私自身も多くのことを学ばせてもらっている。現在、私の研究室や教室には、彼らのお土産である多くの「宝物」が所蔵されている。例を挙げると、ニューヨークの国立書院の国際保健に関する関心は予想以上に高く、着任直後に「国際医療研究会(通称国医研)」の顧問を依頼されて引き受けた。「国医研」の医学科・看護学科の学生たちは、長期休暇などを利用して、積極的に海外での研修や Study Tour に出かけて行き、見聞を広め、他大学の学生と合同

留学生在が、海外での研修や学会、医療協力活動、調査・研究などに行き、帰国の際に、私にお土産として持ってきてくれたものである。これらの「宝物」を眺めながら、異国のコーヒーや紅茶を飲むのは至福の時である。また、帰国した彼らから、珍しい土産話を聞くのが楽しみになっている。一部の大学院生や客員研究員には、彼らの体験を講義の中で紹介してもらっている。昨年は、五月・六月にかけて、英国で開催された世界災害救急医学学会に参加した際に、足を延ばして、ロンドンのセント・トーマス病院とナイチンゲール博物館を訪問した。

白衣の天使と称されたナイチンゲールは、次のような言葉を残している。「天使とは、美しい花をまき散らす者のことではなく、病める人のために

は教育と小児医療に関連する人材と組織作りを軸足を置いて過ごしたつもりです。

佐賀は自然の美しいところ。福岡から三ツ瀬峠を越えて川上峠を過ぎ、嘉瀬川の河畔を通って大学に至る道が、季節により鮮やかな朱色の蔓珠沙華や黄色の菜の花に彩られている景色は photogenic で忘れることは無いでしょう。30年間をこの佐賀で過ごすことができたことを幸せに思っています。

定年に際して



地域包括医療教育部門教授

酒見 隆信

雑感

卒業したら、大学で研修し将来は病院勤務のつもりであった。ところが

ロールモデル

私が卒業した時、将来の目標については漠然としか考えたことがなかった。あまり自分の将来を

と野球を例にとると、野球は1試合に打席4回しか回ってこない。守備機会が試合中1回もない野

と野球を例にとると、野球は1試合に打席4回しか回ってこない。守備機会が試合中1回もない野

と野球を例にとると、野球は1試合に打席4回しか回ってこない。守備機会が試合中1回もない野

と野球を例にとると、野球は1試合に打席4回しか回ってこない。守備機会が試合中1回もない野

退官を迎えるにあたり

佐賀大学での7年半と

ライフワークを振り返って



脳神経外科学講座教授

松島 俊夫

大変お世話になり、ありがとうございました。3月に無事定年退職を迎えることが出来そうです。

試験問題でしたが、新米教授の初仕事ということ引き受けざるを得ませんでした。大変荷が重い

人々と出会うとともに今まで私が全く知らなかった分野のことを学ぶ機会を得ました。フィルムレスを導入した時には、

二つ目の若い人たちが共に暮らせたことですが、まずは脳神経外科医局員や研修医たちと毎日患者



2010年度学生テニス部忘年会

ただ、若い人の考え、生き方に刺激を受けてきました。その他、実習で

三つ目の四季の季節感を感じさせてくれた自然考になればと思います。若い方々の参

市中病院の麻酔科の先生も消極的でした。しかしその時、座位手術の麻酔をかけ助けてくれたのが大学時代の同級生で、偶然同じ病院の外科へ研修にきていた現在佐賀大学附属病院長の宮崎耕治先生でした。卒業3年目の2人が主体となり、この手術を行うことになったのです。手術前の数日間には剖検室を手術場に持ち込み、夜な夜な手術場の手術用顕微鏡下(当時はお粗末なもので)で解剖の勉強をし、手術に臨みました。しかし正常解剖とは違い、しかも慣れない手術用顕微鏡を用いた手術で結果は腫瘍を全摘出することは出来ず、残念ながら終了せざるを得ませんでした。幸いなことに大きな後遺症も起こさず、後日大病院で腫瘍の全摘出をしていただきました。本症例の顕微鏡下手術を体験して、脳神経外科の手術は顕微鏡で覗いた脳解剖に精通しないと上手にならないと骨身にしみ、外科解剖の重要さを自覚しました。それ以来、「微小外科解剖と手術法」をライフワークとするようになっていったのです。手術に難渋した本症例から、私は脳神経外科医人生を掛けた研究テーマをもらいました。若い方々も長い医療人人生の中で治療がスムーズにいかない症例に遭遇されることもあるかと思えます。スムーズにいった症例よりも、うまく行かず苦労したこのような症例からの方が多く、このことを学べます。また臨床の意外なところで研究テーマがみつかるかもしれませぬ。どうぞ、そのような症例を見逃さないように日々の修練を行って下さい。

また私は、若い頃、この微小外科解剖の勉強をするためこの領域で世界の第一人者であるフロリダ大学(米国)アルバート・ロートン教授の研究室へ押し掛ける形で雇っていただきました。初めての外国留学の上、最初は無給研究員でしたので、給料を出してもらえない毎日必死でした。私が死にものぐるいで働いたせいか、先生は英語がほとんど話せない私に毎朝手紙を下さる研究の指導をして下さいました。英会話や給料等のことを考えると無謀な外国留学でしたが、今考えると若いからこそ出来た懐かしさ思い出です。1983年帰国の際、ロートン教授から「研究を一生懸命すると研究が趣味となり、大変楽しい人生になるよ」と言われたのを、今でも鮮明に憶えております。その後約30年間、手術場と解剖室の間を通い微小外科解剖の臨床研究を続けてきましたが、まったくそのように感じておりません。皆さんも、趣味と感ぜられるような楽しい研究テーマをみつけられまことを祈っております。

最後にになりましたが、佐賀大学で出会った素晴らしい同僚の方々、医局員や学生さんたちが、私に良い影響を与え、また支えてくれました。これらの方々との良き出会いのおかげで、7年半、本当に有意義な仕事が出来、楽しい日々が送れました。心の底から感謝しております。本当にありがとうございます。附属病院の再開発もかなり進み、新たな飛躍を実感し始めております。佐賀大学医学部の更なる発展を願って、私の退職の挨拶と致します。

米国国際学会見聞録

医学科2年 鶴田 成一

はじめに

昨年11月16日から約1週間、アメリカ・カリフォルニア州のサンディエゴで開催されたニューロサイエンス学会に参加する機会がありました。その体験を報告します。大丈夫かな?と一瞬不安になりましたが、機内の環境自体はなかなか快適でした。人生初の機内食は美味しく、意外にもデザートにハーゲンダッツが出されて満足いくものでした。ただ、ひとつだけ気になることがありました。それは乾燥です。フライトも後半に入ると湿度がだんだん下がってきて息苦しくなりました。ずっとエアコンが作動している状況ですから無理はありません。マスクがあればまだ良かったのですが、それもなくて済むように感じました。

きっかけ

夏休みに入る直前くらいに、生理学の熊本先生からその国際学会について伺いました。もともと学会というものに興味をもっていましたし、海外に行ってみようというのもあり、参加することを決めました。

大敵は乾燥

まず驚いたのがフライト時間でした。17時に出発して、到着したのは午後10時30分です。ある程度の長時間は覚悟していたものの、やはりかという印象でした。機内はほとんどが日本人乗客でしたが、日本人のCAから何か私だけ何回も英語で話しかけられました。大丈夫かな?と一瞬不安になりましたが、機内の環境自体はなかなか快適でした。人生初の機内食は美味しく、意外にもデザートにハーゲンダッツが出されて満足いくものでした。ただ、ひとつだけ気になることがありました。それは乾燥です。フライトも後半に入ると湿度がだんだん下がってきて息苦しくなりました。ずっとエアコンが作動している状況ですから無理はありません。マスクがあればまだ良かったのですが、それもなくて済むように感じました。



研究者たちと記念撮影

会話好きなサイエンティスト

初めての入国審査もあつたしながら終え、その足でニューロサイエンス学会に向かいました。到着してまず驚いたのは会場の大きさです。端から端まで歩くのに、20分は優にかかります。そしてその会場の中に3万2千人の科学者がいるわけですから、学会の規模が想像をはるかに超えていたことに気づかされました。

この学会の発表形式は、一階がポスターセッションで、二階はパワーポイントを用いた発表でした。二階では著名人と呼ばれる講演会も開かれていました。昨年はグライ・ラマ氏、そして今年にはデズニースタジオ、ピクサー・スタジオの社長であるエドウィン・キャットムル氏が講演していました。



ポスターセッションの様子

発表形式は二つありましたが、ほとんどポスターセッションがメインでした。参加者が3万人を超えるというのに、発表会には人がほとんどいませんでした。これは科学者が一方向のみの情報伝達を嫌うからなのでしょう。それとも科学者同士のセッションが忙しくて、二階に足を運ぶ時間がないのでしょうか。いずれにせよ、科学者が会話好きなのは間違いないようです。

aとeとアプリ

私もまずは一階のポスターセッションに向かいました。といっても、ポスターの列が半端ではあ

りません。A-Zの列が終わったかと思えば、次にA-A-Z、そしてさらにA-A-Z-Z-Zまであるのです。それぞれの列に10や20はポスターがありますから、どこから見ればいいのかまるで見当が付きません。そこで必要となってくるのがアプリです。なんとニューロサイエンス学会専用のアプリがあるのです。このアプリで気になるキーワードを検索し、引っかけたポスターを見に行きましょう。熊本先生は痛みの専門家ですから、まずは痛みに関する発表を見に行きました。当然、ポスターはすべて英語ですが、読み始めようとするたびに壁にぶち当たりました。それはテクニカルチームです。ある程度読めると自負していた英文も、その知識がないとタイトルすら読めませんでした。熊本先生に解説を加えてもらいながら、一個ずつテクニカ

ルチームを書き留めては覚えることを繰り返しました。二日目も再び痛みに関する発表を見に行ったのですが、そこで気づいたことがあります。前日に理解できなかった単語を全力で覚えておいた、何となく解るタイトルが現れ始めたのです。似たようなテーマには大体同じような単語が使われていました。特に目についたのが、differentとdifferentです。それぞれ「求心性」と「遠心性」という意味ですが、これがずいぶんと出ます。「a」と「e」しか違わないので読み間違えとあべこべな文章になってしましますが、両方とも丸みを感じた書体であり、遠くから見たらどちらか解りません。それでも読めるところが出てきたのは嬉しい体験でした。

学会で知り合った中国人に、龍(ロン)さんという先生がいました。龍さんから「メキシコ近くのアウトレットに行くけど来ないか」と誘われたので、連れて行ってもらいました。メキシコの近くというのか、国境のすぐ北側でしたので、メキシコの風景がよく見えました。イメージ通りの景色だったので、来てよかったなと思いつつも注目したのは道路でした。メキシコの道路は舗装されていないのです。当たり前ですが、アメリカの道路はほとんど舗装されています。国境を過ぎた時点で、その舗装が突然消失しているのです。龍さんも、「メキシコに行くときは道がガタガタだから4WDのような車でないといけない」と話していました。なんだかアメリカとの格差をそこに見た気がします。

話す意志とイチロー そうこうしているうちに、学会はあつという間に終わりました。英会話に関しては、話そうという意志さえあれば意外と何とかなりました。サンディエゴはメキシコに近いということもあり、英語が苦手なヒスパニックが多数に居住しています。そういう地理的背景もあり、幸運にも私の話をよく聞こうとしてくれました。たとえコマ切れであっても自分が伝えたいことを話せば、先方が正確な文章で「こういうことですか?」と話してくれます。それでも解らなければ、身振り手振りで話すと理解してくれますし、笑ってくれるので場も和みます。ホテルのカードキーが壊れた際、ホテルマンとの会話の弾みでイチローのモノマネ合戦をしたのは今でも楽しい記憶として残っています。とにかく話そうと思えば、どうにでもなるということです。



サンディエゴの街並み



高校を訪問したLA部一同

今回初めて自分... Love Adviserの略です。ピアカウンセリング

1、LA部とは? 本学部の学生で再結成したピアカウンセリングサークルで、主に小中高生の性教育を行っています。

【活動内容】 学校訪問以外にも、勉強会・報告会、学外団体とのイベント企画、LA部主催のアイスブレイク・ファシリテーション研修会や、他学部を対象とした大学生向けの性教育イベントを開催しています。

【活動の実績、成果】 小中高校訪問では、のちに生徒一人一人の感想文が届くこともあります。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

大学生の今だからできること ~私の課外活動

看護学科3年 筒井 八恵



インド、コルカタのスラムにて

インドのコルカタにてホームステイしながら、マザーテレサの『死を待つ人の家』でボランティアを行いました。

【ネパールの山村の小学校にて】 ネパールでは、山村の小学校にて日本文化の授業と、高齢者施設でのボランティアをしました。

【発足に至るまで】 関東には日本最大の看護学生団体であるION (International Organization of Nursing) (あいおーえぬ/International Organization of Nursing) があります。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

【海外に出てみる】 実際に海外に出てみると、私自身が思っていたよりも小さな世界であって、日本という常識は海外で常識では決まらずに、価値観は文化や宗教によって大きく違うもので優劣などはないというところ。

新聞編集委員

- 倉岡晃夫教授(編集長) 河野史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手、徳田悠希子(研修医1年)、野上愛、吉田紀子(医6)、森下さくら、草場香那、牟田口真理(医5)、壹岐聡一朗、合田夏希、鈴木源晟、橋本健太(医4)、尼寺那佳子、沖藤悠貴、中道あずさ、藤井玲衣奈(看4)、竹藤徳子、溝内絢子、坂井美月(看3)、岩永鴻之介(医2) 要望などの連絡先 学生サービス課総務 gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp

医学部の風景①



2013年クリスマスの夜に撮影

バス停前でライトアップされた煌びやかなこの木。誰が仕掛けたのだろうと調べると、思いから設置したという。何気なく見ているこの光であったが、我々の忘れかけている何かを思い出させてくれるようである。(柴田)

編集後記

他者との出会いは重要である。良き出会いが予期せぬ相乗効果を生み出す例は枚挙に暇がないし、インパクトの強さによっては、その後の人生に多大な影響を及ぼす。本号の退職挨拶記事の端々にそのことが読み取れるので、ぜひ学生諸君に一読をお願いしたい。人と人との出会いを大切にしつつ、という趣旨である。編集委員諸兄の眼力に期待したい。 (倉岡)